

---

# スターフォックス～無より生まれし使者～

アブソル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スターフォックス〜無より生まれし使者〜

### 【Nコード】

N1124U

### 【作者名】

アブソル

### 【あらすじ】

狂気の科学者アンドルフによるライアット系侵略はやとわれ遊撃隊「スターフォックス」達が食い止めた。

フォックス達は激戦の終焉と共に、平和な日常へと戻っていた。だがその日常はいとも簡単に壊れる。

コーネリア防衛軍にある日届いた一通の謎のメッセージ。それは、フォックス達を運命へと導く。

「スターフォックス」は再び戦いにその身を沈める。

誰も傷つかないことは無い、新たな激戦に・・・

## プロローグ 謎のメッセージ（前書き）

どうもアブソルです。

衝動に駆られて「スターフォックス」の小説を初めてしまいました。  
・

時間軸としては「アドベンチャー」の直後。

アパロイドやオイツコニーによる反乱の前と考えていただければ幸いです。

## プロローグ 謎のメッセージ

平穏な宇宙域、恒星ライアット系。

今は争いの陰りさえ見えない宙域だが、かつては大規模な戦火が多発していた場所でもあった。

狂気の天才科学者Dr. アンドルフが率いる私軍によって長きにわたる平穏は崩されつつあったのだ。

第IV惑星コーネリアを中心に激しい攻撃を加えたアンドルフ軍は第I惑星ベノムを拠点とし、各地を制圧していった。

ライアット系の各惑星を制覇し、次々と基地を建立。

時代はアンドルフの闇が覆い隠すものと誰もが恐れていた。

事実第IV惑星コーネリアのコーネリア防衛軍もアンドルフによる侵攻を食い止めきれず、防戦一方だったのだから。

人々は絶望していた。

各惑星は掌握され、頼みの防衛軍も疲弊。

闇の歴史が始まるのかと。そう誰もが肌で感じていた。

だからアンドルフ軍が壊滅的な被害を被り、少しずつだが各惑星から駆逐されているといった衝撃の事実はすぐさまコーネリアの全住民に知れ渡った。

誰が？ いったい誰がアドルフ軍を・・・

人々は真実を知ろうと必死だった。

自分達の希望の星の正体を知ろうと・・・。

真実は直ぐに全世界に伝わった。

衝撃的なニュースからわずか数日。

コーネリア防衛軍がある義賊団を雇ったという事実はいとも簡単に皆が知る所となった。

その名は「スターフォックス」

過去においては無名の、今となっては伝説の英雄達を表す。

その名を人々が正式に知ることとなったのは、アドルフがその野望と共に討伐された後だった

「うはあゝここでも俺達のこと書いてあるぜ！」

青い鳥の姿をした青年が自身の所属する遊撃隊「スターフォックス」の事が書かれている新書【「スターフォックス」〜英雄達の軌道〜】を片手にニヤニヤと笑みを浮かべている

彼は【スターフォックス】のエースパイロット、ファルコ・ランバルディ。

『スターフォックス』きつての古参株で、チームを牽引車だ。

ぶっきらぼうな言動でクールな印象を与えている・・・と本人は思っているのだが、どうしても熱血漢なところが言動より滲み出てしまう。

そんな不器用な所もまた、彼らしいのだが。

今ファルコはこの間発売されたばかりの本の自分の項を読んでいるのだ。

「こっちはいい迷惑だったけどな。取材が殺到して一時はどうなることかと思った・・・」

青年らしいクリアな声。それでいて経験を積んだ大人の・・・戦士の風格も備わっている。

そうファルコの横に座り、両手を頭の後ろで組んでいるこの青年こそ・・・

【スターフォックス】を率いる若きリーダー

フォックス・マクラウド。現在27歳。いくなれば狐人間である。狐型ヒューマノイドと言ったほうが正確か。

「そんなこと言うなよ、フォックス。80年ローンの足しになっただろ？・・・少なくとも饅頭代は浮いたじゃねえか！」

「・・・儲かったのは出版社だけだな！つまる所俺達はダシにされたわけだ。」

鋭い切り返しにファルコがうっとうしく詰まる。

なるほどまさにその通りであった。

【スターフォックス】のメンバーは全員誠実であり、自分達の経験をネタに金儲けをしようなどという考えは微塵も浮かばなかった。

だが、後々から考えると惜しいことをしたものとフォックスは内心思っていた。

自分達はコーネリアのみならずライアット系をランドルフの魔の手から救ったのだ。

無論コーネリアに帰還すれば人々から『英雄』として扱われることは明白。

少しでも金儲けが好きなメンバーがいれば、出版社に直接ネタとして売り込むなり、速攻で戦いの経緯を勇ましきエッセイにするなりしていたはず。

そうなれば莫大なる印税が『スターフォックス』の懐に転がり込んでいた・・・のだが。

そうした頭の回転は残念ながらメンバーの誰一人として持ち合わせではないなかった。

結局の所、ぎりぎりの死線を潜り抜けアンドルフ軍と激戦を繰り広げようやく帰還した【スターフォックス】のメンバーにそのような余裕は残っておらず、その隙をついた形で出版社が自宅で寛ぐフォックス達を強襲。

数々の戦歴を持つフォックスやファルコでさえ引くような熱心さで取材をしたかと思うと、嵐のように帰って行ったのだった。

そしてそれから2週間。

今手元にファルコが持っている新書こそ出版社が電撃のように取材に訪れ、音速のように書き上げた本なのである。

ちなみに発売された瞬間から飛ぶように売れ、あっという間にベストセラー。

出版社の笑いが止まらないのは言うまでもない。

対するフォックス達の手元に残ったのは取材に来た青年が愛想笑いを浮かべつつ手土産として置いていった饅頭（その日のうちにメンバーで完食）、を包んでいた箱のみ。

そのことをフォックスはずっとずっと根に持っているのである。

彼は普段の爽やかで正義感の強い人物像とは異なり、金銭に関しては案外しつこい性格なのだ。

というのも彼の駆る超高性能全領域戦闘機「アーウィン」を積む母船とも言うべき【グレートフォックス】は、彼の父親ジェームズが80年にわたるローンを組み完成させたのだが、父親が行方不明になってから息子であるフォックスが持ち主になっている。

当然ローン返済もフォックスの負担となり、今でも毎月少しずつ払っているのである。

しかも「やとわれ遊撃隊」という非常時以外活躍できないような自由業を営んでいるフォックスにとって月々のローン返済は重荷になっているのだ。

それなのに・・・！

結局一番得をしたのが、自分達が商売や損得勘定に疎いのを知って付け込んできた出版社とは・・・

合法的な行為だったとはいえ胸が理不尽なる怒りに湧き上がるのである。

「ったくよオ・・・いつまで怒ってるんだフォックス。もう過ぎたことなんだし、忘れたほうがいいぜ？」

「過ぎたこと？俺は忘れないぞ、ファルコ。次に取材をしてきたときは門前払いだ！ついでに俺の家の門の通行料を支払わせてやるさ！」

今思い出しても腹が立つ。

ファルコはため息をつくとき、翼でフォックスの頭をポンポンと叩く。

「お前って奴はホント金の事になると心が狭くなるよなあ。優等生タイプの生真面目さが災い・・・というか80年ローンの影響だな」

「マスコミは昔から嫌いなんだ。事実を切り売りするところがな」

そう言うと座ったままファルコから【「スターフォックス」〜英雄

達の軌道〜】を奪い取る。

そして何もかもが気に食わないといった表情でパラパラとページを捲る。

「ほら、ファルコ。見てみる。ここなんかかなり誇張して書いてあるぞ。それにこのページにも・・・」

「はいはい、情けないから止めような」

苦し紛れに本を論うフォックスから本を奪い返すと、ため息をつきつつ鞆にしまう。

「・・・そうだな」

今さらながらついやってしまった行動を恥ずかしく思うのか、フォックスの尻尾が少し下がる。

「だいたいよオ」とファルコはフォックスの椅子の背もたれに腕を乗せ諭すような目になった。

「そうやってゴネても金は振ってこないんだぜ？だいたい目敏い金儲けなんて俺達の性にあわねーだろうが」

ファルコの正論によるカウンターにますます押し黙るフォックス。

「・・・そういえば、クリスタルはどうした？そろそろ会議が始まるだけだな・・・」

つい見苦しい姿を晒してしまったフォックスは、まるで思いついた

かのように口を開いた。

そうやって話題と話の矛先を同じチームの女性パイロット『クリスタル』にさり気無く誘導する。

誘導されたことにも気づかず、ファルコモ「ああ、そついやそつだな・・・」と椅子に腰を掛けた。

そう、フォックス達は今コーネリア防衛軍最高司令官ペーパー将軍に召集されているのだ。

議題は会議の時に提示するという、秘密めいた雰囲気を漂わせていたが。

「遅れちゃったわ」

噂をすれば、何とやら。

自動ドアから入ってきたのは、戦闘用スーツを華麗に着こなす優美な女性。

歩く才色兼備ことクリスタルである。

『スターフォックス』に入隊したばかりの新メンバーであるが、生来持つテレパシー能力と状況判断能力を持つ、頼れる仲間だ。

「よかった、まだ始まってないわね」

相当急いでいたらしく、肩で息をしながらフォックスの隣の席に座る。どうやら走って会議室まで来たようだ。

「クリスタル・・・相当息が上がってるがどうしたんだ？」

「いや、ちょっとメイクを変えようって思っているいる試してたら遅くなっちゃって」

確かにいつもの青味を帯びたメイクではなくほんの少しだが赤いアイラインを入れているようだ。

だが、フォックスはその手の事には鈍感なのでクリスタルがいかなる答えを自分に求めているか、ということに思い至らず「なるほどな」と言つとそのまま会議の資料に手を付ける。

クリスタルの笑顔が凍りつく。

だが彼女も大人なので、凍りついた笑顔のまま鞆から資料をだし机の上に置いた。

寧ろ叩きつけたといったほうが適切かもしれない音量で資料が机に着地する。

その様子をファルコはため息を付きながらチラッと見ると、あと一人会議に来るはずの仲間を待つ。

「スリッピも遅いな」

腕時計を確認する。

本来ならば全員そろっているはずなのだが・・・。

「遅れちゃったあ、ゴメンね皆！」

と会議室に飛び込んできたのは『スターフォックス』きつての技術屋、スリッピー・トード。

戦闘面では今一つだが、メカに関しては圧倒的な知識と技術力を持つ。

彼がいなければ『スターフォックス』の保有する数々の武器も存在してはいただろう。

「おお、『スターフォックス』諸君、急に呼び出してすまんね」

スリッピーが席に座り書類を出していると、彼らを招集した張本人が姿を現す。

コーネリア防衛軍司令官、ペパー將軍だ。

「さてと」

ペパー將軍がゆっくりと腰を掛け、『スターフォックス』の面々を見渡す。

「急な呼び出しですまん。極秘で君たちに伝えたいことがある」

「・・・俺達に？」

フォックスの尻尾がピクリと動く。

「そうだ。ライトット系のある惑星から謎の信号が出されている。救援信号とも援軍要請信号ともつかん謎の信号だ」

「謎の信号・・・回線が混乱してるんじゃないのかなあ」

スリッピの呟くような一言。

だがペパー將軍は首をユツクリと横に振り否定の意を示す。

「この2日間ずっとコーネリア防衛軍に向けて発信され続けている。私も最初はそう思っていたが、どうやら違うようだ」

「それで、その発信源の惑星は何処なんだ？」

机に肘をつきながらファルコが問う。

「・・・驚いたことに君たちと深い因縁がある惑星、つまり第I惑星ベノム。そこが発信源だ」

その一言にフォックス達が凍りつく。

それもそのはず。

ライト系第I惑星ベノム はかつてフォックスと激戦を繰り広げた天才科学者アンドルフが拠点としていた惑星なのだ。

かつては緑と生命が地上を包んでいたが今ではアンドルフ軍による惑星改造により、死と混沌が支配する場所と化してしまった。

因縁の地なのである。

「もしかやアンドルフに関係しているのか・・・」

(馬鹿な。アンドルフは俺達が倒したはずだ。生きているわけがない・・・)

自分の発言を自ら否定するフォックス。

ファルコやクリスタル、スリッピも皆苦々しい表情だ。

「私もそこまでは分らん。だがコーネリア防衛軍にある資料が送られてきた。惑星ベノムからだ。そうやら謎の信号を送っている存在から、とみて間違いないだろう」

將軍は3D装置を卓上に置く。

「・・・3D画像システムですか」

「その通りだ、フォックス。諸君これを見て欲しい」

ペーパー將軍が装置のボタンを押す。

と同時に3D画像がフォックス達の前に出現した。

『コ・・・ネリ・・・ア。惑星コーネリア・・・第1惑星ベノムにいる。私は・・・ベノムにいる・・・』

立体映像も粗く、姿さえ覚束ない。

何より声が機械音声であり、発信源が男性なのか女性なのかさえ不明確だ。

「こいつは一体・・・」

ファルコの一言はメンバー全員の気持ちを代弁していた。

立体画像は一瞬揺らぐが、そのまま『声』は続ける。

『私の所に・・・スターフォックス』・・・彼らを・・・』

ブツン

『声』が告げた最後の一言。

確かに今『スターフォックス』と言った。

「今俺達を名指ししていたよな・・・」

ポツリとファルコが呟く。驚いている証拠だ。

「私が君たちを極秘に呼んだ理由は分かっただろう。この謎の発信源の主は明らかに君たち『スターフォックス』との接触を求めている。それが救援要請か、それとも罠なのかは分からんがな」

「罠にしか見えねえな。救援なら俺達を指名する必要はなねえ・・・」

「だが、アンドルフの脅威が取り去られた今このタイミングで俺達を罠にかける意味がない。もうベノムには使用できる軍事力は皆無だ」

フォックスが腕を組みながら言う。

まさにその通りで第I惑星ベノム におけるアンドルフ軍の主力兵器はフォックス達の活躍によりほとんどがスクラップと化している。対して全領域戦闘機を操る『スターフォックス』はコーネリア防衛軍の最先端の火器がある。

畏であったとしても、返り討ちにあっただけだ。

まともな武器などもう残ってはいないのだから。

「・・・でも行かないとこの謎は解明できないわ。私のテレパシーの感が、そういつて言う」

「確かに。謎は残しておくより、解いた方がいいよね・・・」

クリスタル、スリッピの言葉は的を射ていた。

そうだ。

これが畏であれほかの目的であれ、行くしかない。

「ま、悪戯にしちゃ度が過ぎてるしな」

フォックスはファルコ、クリスタル、スリッピを見渡すと深く頷いた。

この時はまだフォックス達は知る由も無かった。

悪夢の到来に・・・。

そして胎動する新たな敵の存在を。

## 第一話 導かれて

ライアット系、惑星コーネリア軌道域。

そこに四機の超高性能全領域戦闘機が重力を振り切り、一気に加速する。

謎のメッセージを解明するために『スターフォックス』は今飛び立ったのだ。

『フォックス、惑星ベノムまで約30分で到達するよ・・・畏だったらそろそろ攻撃があってもよさそうだけど・・・』

「スリッピーの言うとおりだ。さてとそろそろ、ベノム惑星域に入る。皆、畏の可能性が非常に高い。油断するなよ!」

『任せとけ』

『大丈夫よ』

力強く応答する二人の声。

だが、進んでも進んでも畏らしい畏は無かった。

「妙だな。俺達を排したいならベノム宙域に機雷でも設置しておくのがベストなのに・・・」

『もしかして、本当に救援かもしれないわね』

クリスタルの声にスリッピも反応する。

『でももしかしたらベノムに着陸してから狙い撃ちなんてことも……』

「だが、そうだとでもリスクが高いやり方だ……罫の利点は仕掛けた本人が無事であること……俺達と直接戦闘が避けられない地上で仕掛けてくるだろうか……」

『……どうやら悩んでる暇はないようだぜ』

漆黒の宇宙空間に鎮座する惑星ベノム。

まるで四機の戦闘機を拒むかのような圧力を醸し出している。「

』まったく、いつみても不気味な星だな、おい』

「よし、着陸するぞ。皆！」

『スターフォックス』のリーダーとしての呼びかけ。

全機が一斉にベノムへと突入していく……。

大気圏を抜け、着いた土地は瘴気が充満する大地。

かつての緑が嘘のように消え失せ、まさにこの世の果てといった感じか。

「皆、防護ヘルメット着用の用意だ！ ライアット系他惑星と違って、ここは酸素が極端に薄いからな」

アーウィンを着陸させると、防護ヘルメットを装着したフォックスが地上に降り立つ。

既に他の仲間も降り立っているようで、フォックスが最後のようだ。

「俺達が降り立ったのは惑星ベノムのA-2地区だ。ここから少し離れた所にアンドルフ軍の主要基地の残骸がある。・・・信号はそこから送られているらしい」

「こんな荒れ果てた惑星からなあ・・・罨だと思ってたがどうやら違ったようだしな。最近誰かが来た痕跡が全くねえ」

地面を探知スキャナーでスキャンするファルコ。

風がほとんど吹かない惑星ベノムにおいては足跡は長期にわたり自然保管される。

それがこれだけ信号の発信地に向かってても全くないということは、ここにはだれも来ていないということになる。

「罨を設置した後も無いみたいね」

クリスタルもレーザー銃を構えつつ、どこか安堵した様子だ。

「でもアンドルフ軍の基地内にはあるかも・・・」

「ああ、スリッピーの言うとおりだ。基地の中で俺達を出迎えてくれる気かもしれない」

「手洗い歓迎は勘弁だけだな」

お互い顔を見合わせ、ゆっくりと頷き合う。

ベノムの穢れた大地をゆっくり、一步一步歩を進めていく。

緑が完全に消え失せ、視界に入るのは殺伐とした大地と所々に転がる潰れた兵器のみ。

かつてこの星が緑豊かな大地であったなど、今のフォックス達からしたら信じられない。

この荒れ果てた惑星が、生命の気配に満ちていたなど・・・

「フォックス、あれじゃないかな。アンドルフ軍の廃墟の基地！」

「うへえ・・・まるで幽霊屋敷だな」

フォックス達の目の前に現れたのは、元アンドルフ軍の基地である。

激しい戦闘の爪痕は全く色あせることなく、刻み込まれ異様な雰囲気醸し出している。

「・・・よし、中に入るぞ」

基地にぽっかりと空いた穴からその中へと入っていく。

「誰も居ないな・・・」

ファルコがあたりを見回す。

「クリスタル？どうだ、だれかいるか？」

「いいえ、フォックス。誰も居ないわ。気配が全く感じられない」

誰も居ないのか・・・？

ならなぜここからメッセージが・・・

「コントロールルームに向かおうよ。もしかしたら理由がつかめるかもしれないし」

スリッピの提案に一同が頷く。

(確かにな。コントロールルームからなら転送データや転送日時  
の記録が残っているはず。そこから逆算すれば・・・)

いつだれが何の目的でこの基地を訪れ、コーネリア軍に謎のメッセ  
ージを発信したのか・・・その手がかりがつかめるはずだ。

荒れ果てた廊下をただ歩いていく。

目指すはこの基地のコントロールルーム。

誰も居ないことがほぼ確定していたが、いかなる形で攻撃を受ける  
かわからない。

神経を張り巡らせつつ、ゆっくりと進む。

「着いたな。おそらくここが・・・中央制御室」

コントロールルーム。

この基地に中核を担う心臓部だ。

静かにフォックス達は制御室へと足を踏み入れる。

そこには人の気配は全くなかった。

だが、なぜかコンピュータースクリーンの画面は不気味に光を発している。

・・・電源が落ちていないのだ。

誰もこの基地に戦いの終焉を境に来るはずが無いというのに。

「・・・何故コンピューターが生きている？」

「フォックス、どうやらここには誰も来ていないようだぜ？見てみるよ、コンピューターのキーボードが埃を被ってる」

ファルコが翼でサツと埃を払う。

妙だな。

積もった埃の上に誰かが操作した跡が見つからない。

信じられない、といったふうにフォックスはコントロールボードの上を隈なくチェックしていく。

おかしい・・・

全く操作の跡が見つからない！

「・・・操作痕が全くない。恐らく長い間このコンピューターにはだれも触れていないのだろう」

「じゃあ、コンピューターが勝手に立ち上がったってこと？そんな・・・まさか・・・」

動揺するクリスタル。

いや、彼女だけじゃない。

フォックス達全員、この奇妙な現象に戸惑いを隠せなかった。

『よく、来たね』

その時

声がした。

「誰だ！？」

ファルコが素早く銃を構える。

それに次いでフォックス、クリスタル、遅れてスリッピーがレーザーガンを構え部屋を見回す。

『身構えなくてもいい。僕は敵ではない。』スターフォックスの

諸君』

「……いつたい誰だか知らねえが、敵じゃないなら姿を現したらどうだ!？」

脅すような、ファルコの言葉。

だが全く『声』はそれを気にもしないようで、相変わらず機械音声でしゃべる。

『諸君らを読んだのは僕だ。コーネリア防衛軍へのメッセージはわざと解析度を下げて送信しておいた。不審に思った諸君らに必ず来てもらいたかったからね』

「……コーネリア防衛軍に謎めたメッセージを発信したのはお前だったのか……。一体何者だ？何故こんな回りくどい手を使って俺達をここに……？」

フォックスが声がする方向を向き、問い詰める。

尤も彼の視線の先には無機質な放送用スピーカーがあるだけなのだが……

『その質問に答えよう。僕が諸君らをここに誘導したのは、“観察”するためだ』

「……観察？」

意味が分からない。

そういつた表情のフォックス達に『声』は続ける。

『そうだ。僕は諸君らに多大なる関心を抱いている。だから、実際に惑星ベノムまで来てもらったのだ』

「・・・色々と理屈を言っているが、まずは名前を名乗るのが礼儀じゃないのか？」

ファルコが理屈抜きに敵意と警戒心を持って、『声』に言い放つ。

『いいだろう。僕の名はHALと言つ』

そしてその言葉と共に、コンピュータスクリーンにローマ字で『HAL』の文字が現れる。

「・・・HALか。何故俺達をここまで来させた？観察のような抽象的な言葉でごまかすな。もっと具体的な理由があるはずだ」

謎の声・・・もといHALに厳しい口調で問い詰めるフォックス。

が、フォックスの口調にも全くHALは揺らがない。

『より正確に言えば、僕は諸君らの戦闘能力を測定したい。この説明で満足かな？』スターフォックス『諸君』

HALの機械音声と共に、何かがこのコントロールルームに迫ってくる音が聞こえてくる・・・。

「まずいな・・・」

「ああ、まずいぜ」

「これって」

「罨だあ！」

一瞬互いに顔を見合わせる。

そして

フォックス達は急いでコントロールルームから飛び出す。

『見せてもらうよ、『スターフォックス』。諸君らの実力の程を。アンドルフを破った、その力をね』

誰も居なくなつた部屋で、HALの一言と共にコンピューター画面が消える。

まるで来るべき『罨』の到来を、予言するかのよつに

## 第二話 疑惑

「さっきのHALって奴何モンだったんだ？」

ファルコが長い廊下を走りながらも疑問の色を強める。

「・・・分からない。だが、ヤバい奴だということだけは確かなよ  
うだな・・・」

後ろから迫りくる機械音に急かされつつ、廊下を突き抜ける。

目指す先はアーウィン。

「どこかに隠れてオイラ達を見張ってるんだよあ」

「機械音声で肉声まで隠してね・・・」

クリスタルも忌々しい表情だ。

そんな表情さえ、美しく思えるのは自分だけだろうか・・・。

しなやかな青い髪に沈んだ表情。

俺の保護欲を刺激する・・・。

「・・・何、フォックス？」

いつの間にか走りながらクリスタルを凝視していたらしく、キョト  
ンとした表情で見返される。

「い・いや、別に何でもない」

慌てて顔を俯かせるフォックス。

少し顔が赤くなっているようだ。

そんなフォックスにファルコはからかうような視線を向けていたが、何かに気が付いたようで銃を構える。

「おい、お二人さんよ。いい雰囲気所悪いが、どうやら敵さんが現れたようだぜ？」

モーター音が少しずつ近づいてくる。

廊下の先から、フォックス達の前に立ちはだかるように現れたのは・  
・警備ロボだ。

『侵入者確認。侵入者確認。これより排除を実行します』

レーザーが、フォックスの頬をかすめる。

「ったく」

ファルコが二丁拳銃を連射し警備ロボに命中させる。

「目的を失っても使命を続行する存在か・・・悲しいな」

フォックスはそう呟くと、炎上しつつも、攻撃態勢を取ろうとする

警備ロボに止めの一発を放つ。

「まだ、廊下の奥から気配を感じるわ!」

クリスタルの言葉と同時に、警備ロボが2体同時に出現する。

「チツ鬱陶しい!」

「まったくだ!」

ファルコとフォックスが銃を連射する。

ロボ達もフォックス達目がけて腕のレーザー銃から、攻撃してくる。

飛び交うレーザー光線。

だが、フォックス達の方が警備ロボの攻撃よりも早かったようだ。

警備ロボは対象を認識した後、関係者データリストに載っていないかどうかを確認する作業を必要とする。

そのため、若干だが攻撃まで遅れが生じるのだ。

レーザーが警備ロボのコアを貫き、激しいショート音と焦げ臭い煙が漂う。

「やばい、皆伏せろ!」

直感だった。

フォックスの呼びかけに殆ど反射的に皆が伏せた瞬間

警備ロボが一気に爆発を起こした。

頭上をかすめる破片と熱風。

顔を上げていればタダでは済まなかっただろう・・・。

「警備ロボの気配が消えたわ・・・どうやらあの三体だけだったよ  
うね・・・」

クリスタルが爆風で逆立った髪を撫でつけながら静かに目を瞑り、  
感覚を研ぎ澄ます。

「うん・・・追加はないようね」

「よし、この惑星からさっさと引き上げるぞ。このことを報告する  
必要があるからな」

「警備ロボットを退けたか。なかなか優秀だね、」スターフォック  
ス「諸君」

突如廊下に「声」が響く。

「・・・H A L !」

全員が一斉に身構える中、H A Lは淡々と喋り続ける。

「さすがにアンドルフを倒しただけあるね。基地警備用のロボット  
を一瞬で倒すとはね。瞬発力、状況判断力、射撃技能。全て一級品

だ  
』

「いい加減姿を見せやがれ！こそこそ隠れやがって、お前はロボットを使わなきゃ俺達と戦うこともできねえのか！？」

ファルコの挑発も含めた怒声に、しかしHALは全く動じない。

いや、寧ろ関心がないといった雰囲気だ。

『残念ながら、その通りさ。諸君らとの接触がこのような形でしかできないのは僕としても遺憾に思っている』

女性とも男性ともつかない機械音声が、今となっては耳障りな雑音にすら思えてくる。

『諸君らの力。まだまだ見させてもらおう。そして、この惑星ベノム宙域から生きて脱出出来たならば、また会うこともあるだろうね』  
ブツン、と再び放送が途切れる。

「おいおい、フォックス。やっぱタダで帰らせてはくれないようだな？」

「ああ。だがこの基地には警備ロボは居ない。仕掛けてくるとすれば……」

「空、だな」

そういうと、ファルコは……不敵な笑みを浮かべる。

いや、ファルコだけではない。

スリッピーもクリスタルも、そしてフォックスも皆同じだ。

「どつやら私達を墮とす気にいるようね・・・」

「・・・チーム『スターフォックス』の実力、H A Lに思い知らせてやるわ」

静かに言うフォックス。その瞳には燃え盛る闘志が宿っていた。

止めてあるアーウィンに乗り込む。

重力スラスターが周囲の重力を抑え込み機体を浮かす。

「『スターフォックス』！これより惑星ベノム宙域からの帰還を最優先とする。全機発進！」

一気に四機のアーウィンが一斉にベノムの地から空へと飛び立つ。

当初は拍子抜けするほど何も起こらなかった。

ただ雲を突き抜け、コックピットからはベノムの大地が少しずつ小さくなり、周囲の山々は所々に点在する木々、廃墟となった基地がまるでミニチュアのように見える。

「・・・何も無いね」

スリッピーがいささか安心したように息をつく。

だが・

惑星の重力を振り切り、衛星軌道上に差し掛かった時、突然レーダーに謎の反応が現れた。

「・・・くそ、きやがつたな！」

薄くなった空気を切り裂き現れたのは3機の無人飛行機。

四枚の翼と漆黒の機体。機体を制御しているコンピューター内蔵のコックピットは嚴重に防御され、赤く光るカメラが埋まっている。

けたたましいエンジン音を響かせ、フォックスに向けてレーザー砲が光を放つ。

「甘いな」

が、一気にアーウィンを旋回させると、無人機の後ろをあっさりと取る。

ロックオン表示が出た瞬間、操縦桿のトリガーを引く。

アーウィンの機首のレーザー砲がレーザーを放ち、あっと言つ間に無人機は火に包まれ地上に墜落していった・・・。

「無人機ごときがこのファルコを落とせるかよお！」

フォックスの横ではファルコが迫りくる無人機にレーザー砲の雨をお見舞いしていた。

爆破炎上する無人機。

「後一機だな……」

そう呟いた時、アーウィンの通信画面が反応を示す。

『ペパーだ。少し気になって連絡を入れたのだが……どうやら間が悪かったかな?』

「現在、謎の無人機と交戦中です、将軍。コーネリア防衛軍へのメッセージは罨でした」

外に気を配りながらも、フォックスは通信の続ける。

(あの調子じゃファルコが落としてくれるな……)

そう思っていた矢先、ペパー将軍が思いもよらない指令を出したのだった。

『無人機とな?そうか……フォックス君。手間をかけさせて悪いが、その無人機のコアを回収してくれんか?』

「……回収ですか?」

『ああ。少し気になるのな……』

「了解しました、将軍」

そこまで言うと、映像が途切れる。

さてと・・・回収するとなれば少し厄介だな。

コアを潰さないように、尚且つ落とす・・・

低空飛行で誘ってからできるだけ地面との距離を低くして落とすか。

「ファルコ。ペパー將軍から指令が入った。まだその無人機は撃墜するな」

『ああ？せつかく落とせそうだったのに、見逃すのか？』

「無人機のコアを回収して欲しいと言ってきた。俺が低空飛行で無人機を引き付ける。ファルコ、俺は地面すれすれで飛ぶからお前は俺についてきた無人機を落としてくれ」

『落下のダメージを減らせる作戦か。よし、やってやるぜ！』

頷くと一気にフォックスは高度を下げる。

無人機は一人別行動を取るフォックスをターゲットに選択したのか、狙い通りついてきた。

後ろから放たれるレーザーを軽やかに避けつつ、少しずつ・・・高度をどんどん下げていく。

そつだ・・・もっと食いついてこい。

地面ぎりぎりの高度に達する。

「いまだ、ファルコ！」

『OK!』

ファルコの駆るアーウィンが無人機の後ろを取る。

反応が遅れたコンピューターは後ろをファルコを確認した後、回避行動をしようとするが・

無駄だった。

レーザーが翼を打ち抜き、バランスを崩した機体はそのままベノムの大地に落下。

けたたましい音と共に、砂埃を上げながら地面を這い、しばらく物理法則に従って飛行時の運動エネルギーを摩擦で消費し・停止した。

「よし、俺が下りてコアを」

『オイラが行くよ、フォックス』

その時スリッピーの声が割り込んでくる。

「だが、地面に一番近い俺がやったほうが効率が良くないか？」

その言葉に、スリッピーは「ふっふっふ」と何やら怪しげな声を発する。

『フォックス。コアを機体から分離するのは大変なんだよ？周囲の補助装置を傷つけないように、コードを抜いて、コンピューターを

守りつつ行つ必要があるんだ』

「そ・・・そうか。そうだな」

生憎フォックスは機械いじりは苦手だ。

というかアーウィンの操縦以外は結構苦手なことが多い。

料理や家事は雑だし、字は自他ともに認める汚さだし。

前にファルコが故郷に帰った時、手紙を出してやったら数日後には「久しぶりだな、フォックス。俺は元気にやってるぜ！お前も変わらねえな。相変わらずウナギが躍っているような字で何よりだ」

と言った旨の手紙を返され、少し傷ついたのは懐かしい思い出だ。

スリッピのアーウィンがフォックスの横を通り、地面に着陸する。

と同時にコックピットから出てきたスリッピが墜落した無人機を工具を使い調べ始める。

「俺達は上空で待機しておこう」

「さっさとグレートフォックスに帰還したいぜ・・・」

ふうとため息を付き、ファルコがぼやく。

「でもわざわざペーパー将軍がグレートフォックスまで来るなんてね」

ふと気が付いた。

そうだ。

いつもはペパー将軍が俺達をコーネリア防衛軍まで招くはず。

だが今回は彼自身がわざわざ、グレートフォックスまで・・・

それほど他には聞かれたくないことだったのか？

もしや、ペパー将軍は何か知っているんじゃないか・・・

惑星ベノムからの謎のメッセージの正体を。

うすうす気が付いていて、尚且つそれを誰にも知られなくなかった。

だからこそ指名された俺達にのみ、伝えたのか・・・

いや・・・まさか・・・

『フォックス回收完了したよ』

のんびりとした声がフォックスの耳に届く。

スリッピがコアを回収したな。

帰還したら間髪入れずペパー将軍に尋ねてみよう。

将軍が本当に何かを感じていたのか。

・・・HAL。

奴は一体何者なんだ。

何の理由があつて俺達を攻撃する。

しかも、警備ロボや無人戦闘機の攻撃は正直言って生ぬるい。

俺達『スターフォックス』を本気で潰そうと思っていたとは到底思えない。

寧ろ、俺達の戦闘を観察しようとしていたように思えるが・・・

もしペパー將軍が何か知っているのなら、俺達と接触してきた・・・謎の存在『HAL』についても何か分かることができるかもしれない。

疑惑を胸に、フォックスは惑星ベノム宙域より離脱するのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1124u/>

---

スターフォックス～無より生まれし使者～

2011年10月6日00時59分発行